のである。

カラヴァッジョの名を知る人は当時ほとんどいなかった。もちろん日本には作品はなく、展覧会にもほとんど来たことはなく、美術全集にもこの画家が入っていることは稀であった。幼少のころこの画家のことをテレビでたまたま知った私は、美術史の道に進み、卒業論文も修士論文もカラヴァッジョについて書いて研究してきた。

二〇〇一年、「日本におけるイタリア2001年」の記念事業で朝日新聞社などの主催により、東京都庭園美術館と岡崎市美術博物館で日本初のカラヴァッジョ展が開催され、私はカタログの監修を務めた。このとき、東京会場では入場に長蛇の列ができ、隔世の感を抱いたものである。さらに二〇一六年には国立西洋美術館でカラヴァッジョ展が開催され、やはり大きな話題となった。

私もこの二十年あまりでカラヴァッジョについての本や画集を十冊ほど出版することができ、この画家の知名度の向上に多少は貢献したと自負している。

カラヴァッジョの作品の魅力は、第一に迫真的な写実描写であり、次に劇的な明暗表現、さらに鑑賞者の視点や空間を意識した画面構成にある。

《キリストの埋葬》は、元来ローマの教会の祭壇画で、祭壇の上に掛けられていた。人物群がキリストの遺体を画面下部の墓に降ろそうとしている。祭壇の前にいる信者は、自分たちのいる空間にキリストの遺体が下りてくるように感じ、それが祭壇上に置かれた聖体と重なる思いがしたのである。そのため視点は人物たちの乗る石板のあたりに設定され、見上げるように構成されている。ヴァチカン美術館でも、この作品はやや高い位置に展示されている。

初来日のときは京都の会場は天井が低く、作品を見上げることができなかったが、前述の記事で私はしゃがんで見上げることを勧めた。そのため、京都会場では多くの鑑賞者がしゃがんで見ていたという。今回も残念ながら低く展示されているが、カラヴァッジョの卓抜なイリュージョンをじっくり味わってほしい。

AI時代の生命科学と「知」の在り方

清水 秀幸
（東京科学大学教授）

生命現象は、ゲノム、タンパク質、代謝物といった多数の要素が織りなす、驚くべき複雑性を有するネットワークによって成立している。そこには、人間の直感だけでは捉えきれない無数の相互作用やパターンが潜んでいる。それゆえ、近年の生命科学は必然的に膨大なデータを扱う学問となり、さらに人工知能（AI）が登場したことで状況は一変しつつある。複雑なデータ群の中から法則性を見出し、新たな仮説や設計を創出するAIの能力は、生命の深遠なる謎を探求し、応用する上で、まさに待望久しい力であったのだ。

その画期的な象徴が、二〇二四年のノーベル化学賞を開発者が受賞したAlphaFold2である。生命活動の主要な担い手たるタンパク質の立体構造を、アミノ酸配列情報から高精度に予測するという、長年の科学的難問をAIが解き明かした意義は大きい。これにより、これまで構造が未解明であった多数のタンパク質の機能推定や、それらを標的とした創薬研究などが、劇的に加速される道が開かれた。基礎研究から応用展開に至るまで、その恩恵は計り知れないものがある。

創薬の現場に目を転じれば、AIはまず「創薬標的」の探索を効率化する。膨大な学術文献や遺伝子データ、臨床情報を統合的に解析し、人間の認知能力だけでは見出し難い新たな疾患原因候補（例えばがんの増殖に関わる特定のタンパク質など）を迅速に同定する。次いで、標的に作用する「候補化合物」の設計と最適化である。生成AIは、標的分子の構造情報などを基に、有効性が高く副作用が少ないと期待される、全く新しい分子構造を計算機上で「デザイン」することが可能となった。これは、従来の発想や合成手法では到達困難であった化学空間の探索を促し、既成概念を超えた新薬創出の可能性を拓くものである。さらに、候補化合物の「有効性や毒性の予測」精度も向上している。AIが化合物の構造特性や既知の実験データを学習し、開発の初期段階で有

そんな不快な症状に救心。
生薬の力で血流を改善し、
どうき、息切れ、気つけに
優れた効果を発揮します。

どうき・息切れ・気つけに
救心 第2類医薬品
救心製薬株式会社
〒166-8533 東京都杉並区和田1-21-7
「血流いきいき読本」進呈
ハガキに①〒住所②氏名③年齢を明記の上、弊社お客様相談室BS係まで。いただいた情報は資料発送以外では使用しません。ただし、個人を特定出来ない状態で統計データとして使用することがあります。

望な候補を絞り込み、リスクの高いものを除外することで、研究開発の効率は格段に向上するのである。

これらの技術的進展は、実に目覚ましい。近年の大規模言語モデルの長足の進歩により、明確な解が存在する問題を処理するＡＩの能力は飛躍的に向上した。これをもって「もはや勉強は不要」とする極論すら、一部では聞かれるようになった。

だが、現実はむしろ逆ではあるまいか。疾患の複雑な機序解明や、多様な患者背景を考慮した治療法の開発など、唯一無二の正解が存在しない難題が集積している。そもそも如何なる論題を立てるべきか、ＡＩが示した複数の提案の中から何を採用し、あるいは棄却するのか。その枢要な判断を下すためには、当該分野に対する深い知識と洞察、すなわち人間の「知」こそが不可欠なのである。ＡＩは強力な利器ではあるが、それを真に使いこなすためには、むしろ従来にも増して人間側の思考力や判断力が厳しく問われる時代となったと言えよう。

ＡＩはあくまで強力な「道具」であり、その真価を発揮するには、ＡＩ専門家と生命科学者の緊密な連携、そして生命への深い洞察と倫理観が必須となる。ＡＩと生命科学の融合は、今まさに加速の途上にある。この変革期にあって、ＡＩという新たな知性を活用しつつ、我々自身の知性を不断に磨き、生命への畏敬と倫理観をもって未来を切り拓いていく。その営為の中にこそ、真の科学の進歩はあると確信する。ＡＩとの協働が、生命のより深遠なる理解と、難病克服や健康寿命の延伸といった人類の宿願達成に資することを期待したい。

〝全裸編集部〟が青春だった

本橋信宏（作家）

文章を書いて暮らしていけたら、どんなに素晴らしいことだろう。

小学生のころから思い描いていた夢は、高校三年の秋、具体的な像となって私をとらえた。

本誌文藝春秋一九七四年十一月特別号に立花隆「田中角栄研究　その金脈と人脈」と、児玉隆也「淋しき越山会の女王」が掲載されると、政権スキャンダルに発展し、ついには田中内閣が総辞職に追い込まれた。

ルポライターという存在があらためて私を虜にした。

一九七八年、大学四年の秋、フリーランスの物書き稼業になろうとしても、入口がわからず、就職戦線でもテレビ、代理店に弾かれてしまった。

たまたま声をかけてくれた週刊大衆が、私に見開き二ページの連載コーナーを

もたせてくれた。ついに私がすぐれた書き手だったからではなく、最近まで大学生だったのが主因だった。

八〇年代初頭、女子大生がアルバイトでホステスをしただけで特集記事が組めた時代だった。「キャンパスギャルのセクシートーク」という二ページの連載が足場になった。ゆくゆくは現代資本主義分析、講座派・労農派の現状といったテーマを書こうと思っていた私は、形而上の世界を切って捨て、形而下で生きていこうと決心した。

今年一月、刊行した「全裸編集部　青春戦記１９８０」（双葉社）は、週刊誌が今よりはるかに元気だったころ、週刊大衆を主戦場に選んだ私的回想録である。

一九八〇年頃、奇妙な喫茶店が繁華街に出現した。男性客がソファに浅く座り、磨かれた鏡貼りの床を駆け出し記者の私は連日、飛び込みでノーパン嬢のインタビューを試みた。

広告料金を取ろうという悪質記者と勘違いした店長が、私を店の奥の倉庫に監禁した。取材だと説明して誤解がとけると、店の女の子たち全員を集めて自由に撮らせてくれた。普段はシャイで腰が引けた自分が、取材になると人が変わることが快感だった。

著名人直撃取材もよくやった。

「巨人の星」「あしたのジョー」「空手バカ一代」。相次ぎ原作を大ヒットさせた梶原一騎の隠れ家風事務所を訪ねた。

義兄弟とうたわれた極真空手大山倍達総裁と大喧嘩していた梶原一騎は、警視庁ＳＰが持つという特殊警棒を得意げに振り回した。

荒くれの振る舞いに驚きもしたが、新人記者の前で見せた脇の甘さは悪い印象ではなかった。大勢の取り巻きのなかでも、一番若い私が何か言葉を発すると、劇画の首領はよく拾ってく

春の田

小澤實

安曇野の畔のはだらに青むなり
春の田に轍の深くうねりたる
春の田の一隅にして葱つくる
はや駆けてサラブレッドの仔馬かな
母馬へ仔馬たちまち駆けもどる
草に脚のべて仔馬の休みたる

じっと見ているのだ。下着をつけず超ミニで客にコーヒーを運ぶ、ノーパン喫茶という新形式の店が爆発的に増殖した。